

津軽家一門の法華信仰と女人法華について

篠村 正雄

はじめに

法華經の女人救済に係る先行研究をみると、植木雅俊氏は原始仏教では男女の別なく成仏できるとし、紀元前三世紀末からの小乗仏教になると変成男子といって、女性は男子に生まれ変わった後に成仏できるといふ女性輕視・女性蔑視の傾向が強まり、紀元前後から興った大乘仏教では、法華經において女人のままで成仏するという思想が現れるようになったとする^①。石川教張氏は、日蓮が法華經（提婆達多品第十二）における龍女成仏から女性の即身成仏の法門を語り、法華經の女人として生きる道を示したとする^②。菅原征子氏は、江戸時代の男子専制・女性従属の徹底したジェンダー社会で、女性が出家して尼僧になることができた、財力があつて熱心な信仰を持つて寺院の開基になることができた。また、日蓮宗の僧侶は法華験者（行者）として鬼子母神像を祀り、安産・病氣平癒の祈祷により靈驗を発揮して女性信者を獲得していったとする^③。

江戸の法華信仰について、北村行遠氏は、寛文二年（一六六二）、幕府は太鼓・鐘を叩き、題目・念仏を唱える題目講・念仏講を禁止したが、題目講は記録に残るものが三九九講を数え、日本橋・京橋、本所・深川、

麻布・芝・高輪、神田・湯島・小石川、浅草・下谷とほぼ江戸全域にわたって存在し、身延山久遠寺（日蓮宗 山梨県身延町）の出開帳や寺院の行事に参加し、一九世紀前半に最盛期を迎えたとする^④。望月真澄氏は、寺請制度によつて、各家が檀家として菩提寺を持つようになるが、他宗の檀家でも熱心に日蓮宗を信仰して、その人一代に限つて帰依する例があつたとする。また、祈祷による現世利益を通して、檀家制度の枠を越えた信仰関係の存在を指摘している^⑤。

弘前藩では寛文元年、切支丹改衆、延宝六年（一六七八）、寺社奉行が任命されて寺社行政が整えられた。菩提寺が寺請証文を発行するようになると、各家は菩提寺を決めてその檀家となつていった。藩庁は離檀の場合、寺院双方の話し合いに依るとしたが、不可能に近かつた。藩主家は江戸で津梁院（天台宗 東京都台東区）を菩提寺とするところから、四代藩主信政は国元で報恩寺（同宗 弘前市）を創設して、菩提寺を長勝寺（曹洞宗 同市）から変えていく^⑥。

先に弘前藩領の勸化で、本行寺（日蓮宗 弘前市）・護国堂を調べていると、津軽政模が五番善神・三十番神・日蓮上人座像を寄進していることが解つた^⑦。曹洞宗を菩提寺としてきた藩主家の一門にあたる政模が、

何故、日蓮宗に肩入れするのか課題として残った。そこで、津軽家一門、特に津軽信経家における法華信仰と、法華信仰がみられる女人について考察する。

主に使用する史料「弘前藩庁日記」は、江戸と国元での記録であり、以下、「江戸日記」、「国日記」と略称する⁸⁾。また、断らない限り「津軽家一門并六家系譜」⁹⁾を使用している。

一 津軽信経家の法華信仰

(1) 初代信経(千之助、伊左衛門)

初めに政模の父信経について見ていく。

系図は「津軽家一門并六家系譜」と『津軽藩旧記伝類』¹⁰⁾によった。『津軽藩旧記伝類』は明治七年(一八七四)、弘前藩一二代藩主であった津軽承昭が下沢保躬等に編集を委嘱し、同一〇年に出来上がった。「津軽家一門并六家系譜」は同八年に大道寺繁禎の弟繁充が編纂したもので、『津軽藩旧記伝類』に引用されている。信経家の部分は同八年、信経の本家九代模正と分家六代尚志が書上げたもので、家老を執政、用人を参政と書き換えている箇所があつて注意を要する。

表1は「本行寺過去帳」と「津軽家一門并六家系譜」によって作成している。No.1～37までは主に津軽信経家の当主・室であり、子女は取り上げていない。表2の記号アースは津軽信経家以外の法華信仰の女人を取り上げてある。墓石欄の「有」は、関根達人氏が平成一六年(二〇〇四)より進めている墓石調査により確認している¹¹⁾。

信経(No.5)の生涯については、田澤正氏の考察があるが、信経の戒名・墓石については改めて調べてみたい。

信経は、正保四年(一六四七)、三代藩主信義の次男として生まれ、二一歳で旗本御書院番に任じられたが、延宝六年(一六七八)、三二歳で病氣を理由に致仕し弘前に移った。兄の四代藩主信政と折り合いが悪く、天和元年(一六八一)一二月五日、三五歳で病死し、耕春院(曹洞宗、現宗徳寺 弘前市)に埋葬された¹²⁾。

明治に耕春院を改称した宗徳寺の過去帳二冊の内、慶長二年(一五九七)から寛保三年(一七四三)の記載のあるものを(A)、題箋「日牌献□」とあつて、居士・大姉号だけを記載したものを(B)とする。

「史料1」「宗徳寺過去帳」

(A) 覺應院殿深山幽松居士 天和元年辛酉年十二月五日

津軽千之助父 伊左衛門事

(B) 覺應院殿深山幽松大居士

天和元辛酉 津軽内膳

十二月

(A)の津軽千之助は父の幼名を名乗った二代政模を指す。(B)の津軽内膳は、政模が元禄一四年(一七〇一)に名を改めているので、同一六年に二三回忌の法事に施主となった際に、耕春院が「大居士」を贈ったものと考ええる。

次に宗徳寺にある信経の墓石を取り上げる。

「史料2」「宗徳寺墓石」¹³⁾

(正面) 覺應院殿深山幽松大居士

(右側面) 天和元辛酉年二月初五日

(左側面) 津輕信經菩提塔

(裏正面) (家紋と刻銘を削り取った痕がある)

この墓石は供養塔であることから、明治一〇年の弘前初代藩主為信の高照神社合祀、同三十九年の藩祖三〇〇年祭で藩主家に対する崇敬が高まった時に、不用になっていた墓石を再利用して宗徳寺に納めたものと推定する。

次に、本行寺(日蓮宗)の過去帳をみる。

「史料3」「本行寺過去帳」五日

天和元^{辛酉}正月

覺應院殿深山幽松大居士

信經 伊左衛門事

信經の戒名は、「国日記」が「覺了院」とし、藩庁の記録を基にした「津輕家一門并六家系譜」・「新選津輕系譜」¹⁵は「覺了院」を採用しているが、宗徳寺過去帳・本行寺過去帳からみて戒名は「覺應院殿深山幽松」が正しい。また、「新選津輕系譜」が本行寺に埋葬したとするは誤りである。「宗徳寺過去帳」には信經以後の子孫の戒名はみあたらない。

藩主信政にとって信經の言動を許容することができず、そのため幕府への再出仕も認めなかった。この後の延宝五年、信政の弟傍島帯刀の高野山への出奔・出家、元禄二年、異母弟信章の秋田藩領への越境事件は、信經の処遇を含めて信政が藩主権力を確立する過程に於いて排除されていたもの¹⁶と考える。

① 信經の母(No.1)は、寛文一二年(一六七二)の「江戸日記」に「伊左衛門御袋」が死亡し、国元へ飛脚で知らせているところから、死

亡場所は江戸になる。¹⁷(No.2)は、延宝六年の「国日記」に貞昌寺で「伊左衛門北堂」の七回忌が行われたとある。¹⁸よって、この二項目は同一人物であり、三代藩主信義の側室で信經の生母とみられる。

② 延宝六年、信經の二男志津之助(No.3)に続いて長男綱之助(No.4)が死亡したが、埋葬場所は不明である。¹⁹

③ 信經の室(No.7)は、駿河国御厨(御殿場市・裾野市・小山町)の牢人星野八郎兵衛の娘²⁰で、信經と共に弘前へ移ったとみられる。天和三年、信經の三周忌は一周忌に倣って行われ、信經の室が耕春院で焼香している。²¹また、貞享三年(一六八六)、藩庁から彼岸の耕春院・本行寺参詣の許可を得て、足輕目付の付き添いのもとで出かけている。²²宝永四年(一七〇七)、亡くなり本行寺に埋葬された。同寺の過去帳に「津輕政模母儀」とあり、政模の嫡母と考える。

④ (No.8)は、信經の室の母にあたる。元禄一三年、孫政模から江戸瀬戸物町(東京都中央区)に住む六五歳の祖母を引き取りたいと藩庁に願い出て認められている。²³正徳元年(一七一)、七六歳で亡くなり本行寺に埋葬された。

⑤ 政模の実母(No.6)について、次に二点の史料をみる。

「史料4」

(A)「本行寺過去帳」八日

元禄八^{乙亥}五月

椿庵妙寿大姉

津輕政模奥 実母

(B)「森岡氏由緒書」²⁴

妾、元甫ノ実母、元禄八乙亥年五月八日病死、法名椿庵妙寿大師

(A)に「政模奥 実母」とあるが、奥と実母は矛盾することから信経の奥とみたい。政模は天和二年の生まれの一四歳で奥方を娶るには若く、実母とするこの方は信経の側室になる。

(B)は森岡家六代元長の妾とする。椿庵妙寿は江戸から信経に供した女中で、信経の死亡した翌年に二代政模を生み、後に森岡家六代元長に再嫁したと推定する。森岡家は梅林寺(曹洞宗 弘前市)を菩提寺とし、椿庵妙寿もここに埋葬されたが、日蓮宗を信仰するところから本行寺での追善供養を望み、「本行寺過去帳」に記載されたとみる。

信経は耕春院(曹洞宗)に、室とその母が本行寺(日蓮宗)に埋葬されていることが解る。江戸は日蓮宗と浄土宗が盛んで、日蓮宗を信仰する室は、彼岸に本行寺に参詣してここでの追善供養を望み、室の母、椿庵妙寿も同じように本行寺での供養を望んでいたと考ええる。

(2) 二代政模(千之助、内膳、頼母)

① 政模(No.10)は天和二年(一六八二)の生まれで、父の幼名千之助を名乗り、藩主信政は三〇人扶持、信経の室に銀三〇枚・五人扶持を与え、次第に藩主家一門として待遇するようになった。五代藩主信寿のもとで加増を重ね、正徳四年(一七一四)、家老に任じられ、享保三年(一七一八)、頼母と改めている。

同元年、政模は本行寺に五番善神・三十番神・日蓮上人座像を寄進している。

〔史料5〕本行寺・護国堂(県重宝)「日蓮上人座像」の台座銘⁽²⁵⁾

発願主 当山十世寿遠院日進

大檀 津軽内膳尉政模

法号 津潤院殿政模

(享保元年)
正徳第六丙申年 五月廿八日

政模は日進の発願に、鬼子母神を含む祈禱本尊の五番善神像を寄進している。本行寺は諸像を納め、領内五穀豊穡を祈禱する護国堂(祈禱堂)建立を藩庁に願い出ると、藩庁は領内勸化の願いを奇特として認めた。⁽²⁶⁾これには、藩主信寿と従弟に当たり、家老を勤める政模の存在があったものとみられる。同七年、護国堂本尊の遷座式が行われた。⁽²⁷⁾

政模の戒名は「本行寺過去帳」に次のようにある。

〔史料6〕「本行寺過去帳」二二五日

(享保九庚申)
□□□□五月

輝光院殿法政日模

津軽政模事

護国堂の「津潤院殿政模」の方は生前に授けられる逆終の戒名で、政模の死亡の際に戒名を変えたものとみられる。⁽²⁸⁾

政模は日進に家族の追善供養を契機に、自らも入信し、本行寺を菩提寺に定めたものと考ええる。

② 政模の室真武(No.12)は森岡主膳の娘で、享保一三年に亡くなり、本行寺に埋葬されている。森岡家は梅林寺(曹洞宗)を菩提寺とし、家老職を輩出する家柄である。

日進は祈禱に秀でた僧で、享保七年誕生の勝之助の病除祈禱を藩庁か

ら依頼されるほどであった。⁽²⁶⁾ 同一一年に遷化し、墓石は法立寺（日蓮宗弘前市）にある。

(3) 四代範盛と後室安住院

① 範盛（No.19）は、為貞を初代とする一門の四代貞栄の次男に生まれ、七歳で信経家の家督相続が認められた。室（No.15）は三代克模の娘である。明和七年（一七七〇）、範盛は家老に任じられている。弘前藩領は天明三年（一七八三）から大飢饉に陥り、米価の高騰から青森騒動といわれる打ちこわしが勃発し、失政が咎められ、同六年、閉門を命じられている。⁽²⁷⁾ 同年、閉門が許されて蟄居を命じられたが、この時、分家寧都の三男が五代模宏（No.27）として家督相続している。寛政二年（一七九〇）、蟄居が許され、同四年三月晦日に五十二歳で死亡している。

② 次に砂子沢（平川市）鬼子母神堂の法華經に関して史料二点をみる。

〔史料7〕

(A) 砂子沢・鬼子母神堂蔵「法華經第一」

(表紙見返し) 津軽内膳法名

自然院殿耀圓日利居士 三月晦日

安住院殿妙圓日中大姉

(奥付) 奥州津軽黒石日宣（刻印）「法嶺再興日宣」

(B) 「本行寺過去帳」

晦日 寛政四^{壬子}三月

自然院殿耀圓日利

津軽内膳事

二六日 文化癸^酉十一月

安住院殿妙圓日中

津軽頼母

(A) は鬼子母神堂にある法華經の表紙の見返しに、津軽内膳⁽²⁸⁾、法名自然院殿耀圓日利居士とあり、三月晦日は、(B) 「本行寺過去帳」から寛政四年三月晦日が命日であることが解る。奥付の日宣は妙経寺（日蓮宗黒石市）一八世である。

日宣は文化一四年（一八一七）、高館村（黒石市）山中にある石塔が日蓮の弟子日持の旧跡として、法嶺院⁽²⁹⁾（日蓮宗 同市）の復興に努めた。この法嶺院に納入する法華經の寄進に「安住院殿妙圓日中」（No.24）が応じたもので、夫範盛の追善菩提を祈るためのものであった。この安住院は「津軽家一門并六家系譜」から抜け落ちている。範盛の室（No.15）は、明和二年に死亡していることから、安住院殿妙圓は後室と考える。日宣は文政九年（一八二六）、参籠者の銀蔵の手により悲惨な横死を遂げた。⁽³⁰⁾

弟子日遷が妙典寺（日蓮宗 和光市）二三世から法嶺院五世として入山した。ところが、山林伐木をめぐって高館村と揉合になり、安政二年（一八五五）、村方は本堂・墓地を破却し、日遷は遠光寺（日蓮宗 黒石市）へ退院した。⁽³¹⁾ この時、寄進された法華經も遠光寺へ移り、砂子沢・鬼子母神堂の祭礼に遠光寺住職が依頼されるところから、法華經がここに移されたものと推定する。

(4) 六代模之と順宏・津輕琢玄

① 六代模之 (No. 26) は文化二年 (一八〇五) の生まれで、文政七年 (一八二四)、嫡孫相続している。これは、父順宏が蟄居中であり、親族が相談のうえで願ひ出たものと考ええる。同一二年、二五歳で亡くなっている。このことから順宏は信経家の歴代から省かれていることが解る。

② 天保一〇年 (一八三九)、三河国吉田藩三代松平信明の六男順承は、支藩黒石家八代親足に養子として入り、後に弘前藩一代藩主に迎えられた。⁽³³⁾ 津輕家の血統を守ろうとする血統派で中小姓格中村良吉に、順宏 (No. 29)・七代順範 (No. 34) 父子も加わり、先代藩主の復権を画策して家老津輕多繕と対立した。しかし、復権画策が露見したため、弘化二年 (一八四五) になって父子の処分が決まり、弘化の変と呼ばれる。順宏は家柄に似合わず、国恩を忘却したとして分家津輕主水へ預けられ、一間所慎を命じられた。⁽³⁴⁾ 順宏は父に倣い東山と号し、沢田流書道に堪能であったが、同三年、六八歳で死亡している。八代模久の死体引き取りと葬儀の願ひに対し、藩庁は目付を通して、夜に入ってから死体を引取り、葬儀を行うようにさせている。⁽³⁵⁾

③ 津輕琢玄 (No. 37) は天保一四年、順宏の八男に生まれ、幼名を捨藏と称した。四歳で父に死別し、六歳で本行寺二四世日琳の弟子に入った。藩庁へは安政元年 (一八五四) に届け出ている。⁽³⁶⁾ 張商英の『護法論』⁽³⁷⁾ に、一子が出家すれば、本人を含めて先祖四代、子孫四代の九族が天に生まれるとあり、親類が相談して不遇であった父順宏と先祖の追善供養のために、菩提寺本行寺に弟子入りさせたと考える。

水戸・三味堂檀林に学び、明治一七年 (一八八四)、実相寺 (日蓮宗

つがる市) に一九世唯仏院日魁として入山し、同四四年に遷化した。⁽³⁸⁾

(5) 八代模久 (福嶋千之助)・九代模正 (範)

① 模久 (No. 33) は文政一二年 (一八二九)、六代範久の長男に生まれ、天保一〇年 (一八三九)、家督相続し、翌年、千之助と改名している。弘化二年 (一八四五)、祖父順宏・養父順範が先藩主復権運動に加担したことにより、知行と屋敷が没収、津輕姓が取り上げられたため福嶋千之助を名乗った。また、永の暇が申し渡され後に、改めて一門の家柄により各別の慈悲をもって三〇人扶持が給され、留守居組に入れられた。⁽³⁹⁾ 安政五年 (一八五八)、諸手足輕頭に任じられている。⁽⁴⁰⁾ 翌年、二代藩主承昭から三〇〇石が給され、文久元年 (一八六一)、三三歳で亡くなっている。

② 模正は万延元年 (一八六〇) の生まれで、文久元年に家督相続し、翌年津輕に復姓が認められ、二〇〇石の加増があり、使番格に任じられている。

文化三年 (一八六〇) の「弘前分見真図」⁽⁴¹⁾ では、津輕頼母の屋敷が白銀町 (現在の弘前市役所の所) に、津輕主水の屋敷が下白銀町 (現在の弘前市文化センターの所) に見える。模久が弘化二年、屋敷を没収された後は何所に移転したかは不明である。明治四年 (一八七一) の「士族在籍引越の際之地図」⁽⁴²⁾ では、元津輕金太郎の屋敷として下白銀町 (現在の青森県弘前健康福祉庁舎の所) に見える。また、元津輕図書⁽⁴³⁾ の屋敷は以前からの下白銀町 (現在の弘前市文化センターの所) に見える。

(6) 分家 初代寧都(主水)

寧都(N₀17)は、享保三年(一七一八)、信経家の二代政模の次男に生まれ、政模が家督相続の時に、知行五〇〇石が分けられて分家を興した。明和七年(一七七〇)、五三歳で亡くなり、本行寺に埋葬されている。

室と妾について、次の史料をみる。

〔史料8〕

(A)「本行寺過去帳」

(A-1)「本行寺過去帳」 三日

宝暦七_丁丑六月

偏照院殿妙清日受大姉

津軽主水 奥方

(A-2)「本行寺過去帳」 九日

明和三_丙戌八月

秋月院妙来日明

津軽主水 後室

(B)「津軽家一門并六家系譜」

(B-1)(寧都)妻以千 棟方作右衛門藤原貞良女

宝暦七年_丁丑六月三日卒

积号 偏照院殿妙清日受 葬于本行寺

(B-2)妾 青海源兵衛女

明和三年_丁戌八月九日卒

积号 秋月院妙来日明 葬于本行寺

妻以千(N₀14)は(A-1)(B-1)の記載に矛盾は見られない。津

軽主水^(寧都)は当主を指す。(A-2)は秋月院を後室とするが、(B-2)は妾とする。院号戒名で院殿は付されず、ランクが一段下の戒名になっている。婚姻は藩庁に伺いの後に、縁組・結納・婚礼を済ませて正妻(室)として認められた。ここでは、室の死後に家を切り盛りしていても、後室の扱いを受けていないことになる。

信経家の仏事の営為は不明であるので、類例として八代藩主信明の書き残した「在国日記」⁽³⁾を参考に見ていく。これによると、起床して朝食前に仏間とみられる霊殿を拝している。寛政二年(一七九〇)一月五日は初代藩主為信の祥月命日にあたり、長勝寺に参詣し、御影堂・位牌所を拝している。また、他日の記事によれば、神拝し、守札・護符を戴いていることから、神棚があり、勢至菩薩・毘沙門天を拝し、庚申には家臣と夜通し過ごすような生活を送っている。

この例から、信経家においても日常生活で神仏を拝み、先祖の建夜・忌日には供物を備え、親類・縁者が集まり、菩提寺・本行寺での通夜・葬式、年忌の際にも親類・縁者による仏事が行われたとみられる。この仏事を通して一族の結束が強められ、自ずと法華経に対する信仰心が醸成され、出家一人を出していったと考える。

二 女人法華

鎌倉時代から社会の中心が男性にあって、女性は自由に自分の信仰を持つことができなかった。その中で、徳川家康の側室・養珠院(万)は身延山久遠寺(日蓮宗 山梨県身延町)二世日遠に深く帰依し、頼宣

(紀州藩初代藩主)・頼房(水戸藩初代藩主)も生母の信仰を受け継いでいった。また、女性として初めて七面山(身延町)登詣し、女人禁制から解放させている。⁽⁴⁴⁾

庶民の女性でも地域の日蓮宗寺院に参詣し、子供の守護神・鬼子母神を信仰した例がみられる。⁽⁴⁵⁾

(1) 津輕勘解由の母

二代藩主信枚の九子為節は、寛文一二年(一六七二)に亡くなり報恩寺(天台宗)に埋葬され、二代為永は延享四年(一七四七)に亡くなり、耕春院(曹洞宗)に埋葬されている。

為永の室(記号ア)について、二点の史料をみる。

〔史料9〕

(A)「本行寺過去帳」晦日

宝永七寅 七月

慈眼院殿妙聚日量

津輕勘解由

(B)「津輕家一門并六家系譜」

妻 新藤庄兵衛女^(正室)

寛文十二年壬午十二月十八日 縁組

宝永七年庚寅七月晦日卒^(朱筆)

釈号 慈眼院殿妙聚日量 葬妙法山本行寺^(朱筆)

為永の室は、夫と異なる本行寺(日蓮宗)に埋葬され、(B)は死亡年月日と戒名を朱筆で記してある。(A)の津輕勘解由は施主を指す。三

代永豊は初め平十郎、後に織部、勘解由を名乗り、享保一三年(一七二八)に亡くなり報恩寺(天台宗)に埋葬されている。室・後室は耕春院に埋葬され、以後、耕春院を菩提寺としている。

為永の室は、生前から本行寺での葬儀・埋葬を強く望んでいたことにより、家族・親類が許容したものと考える。

(2) 津輕中務の伯母

三代藩主信義の一七子政順は、元禄八年(一六九五)に亡くなって貞昌寺(浄土宗)に埋葬され、ここを菩提寺にしている。

次に「本行寺過去帳」をみる。

〔史料10〕「本行寺過去帳」二二五日

享保七壬寅

浄土閑院殿理屋日専

津輕中務 伯母

三代政幸は、長七郎、中務を名乗っていたが、母方の姓を名乗ることを願い出て、工藤佐治右衛門に改めている。

「津輕家一門并六家系譜」には津輕中務・伯母(記号イ)の記載はなく、嫁ぎ先も不明である。この伯母が生前、甥に本行寺での追善供養を遣い残していたと考える。

(3) 津輕為貞家と堀家^(大蔵)

三代藩主信義の八子為貞は、慶安二年(一六四九)の生まれで、四代藩主信政と生母(久祥院)を同じくし、報恩寺(天台宗)を菩提寺とし

ている。

① 三代貞如の室（記号ウ）について次に三点の史料を挙げる。

〔史料11〕

（A）「本行寺過去帳」一二日

寛政三_{辛亥}正月

蓮照院殿実相妙悟日乗

堀蓮永娘 津軽多繕母

（B）「報恩寺過去帳」一二日

寛政三_{辛亥}年

蓮照院 実相妙耀大姉

正月一二日 津軽大式奥

（C）「津軽家一門并六家系譜」

妻千屋宇 堀伝左衛門菅原利広女 元文二年_{丁巳}生 寛政三年_{辛亥}

正月卒 享年五十五

积号 蓮照院殿実相妙耀 葬報恩寺

貞如の妻千屋宇の父堀伝左衛門について、「本行寺過去帳」に次のようにある。

〔史料12〕「本行寺過去帳」九日

寛政九_{丁巳}八月 堀蓮永 号不染居士

唯実院殿永連日誦居士

一〇一喝一字□之書写有俗中最信

□□□ノ族ヲ受実□而三昧堂成却

津軽為貞家は報恩寺、堀家は本行寺を菩提寺とする。（A）の「日乗」

は日蓮宗で戒名に付ける日号になり、妻千屋宇は本行寺での追善供養を望んだことは確かである。

② 四代貞栄は津軽外記の三子で多繕を名乗り、室（記号エ）は貞如の娘である。

次に史料三点をみる。

〔史料13〕

（A）「本行寺過去帳」九日

享和二_{壬戌}九月

真光院殿楽邦妙誓大姉

津軽多繕奥方

（B）「報恩寺過去帳」九日

享和二_{壬戌} 津軽多繕後妻

真光院殿楽邦妙誓大姉

九月 行年四十六才

（C）「津軽家一門并六家系譜」

（貞栄）妻 大式貞如女 明和七年_{庚寅}十一月十二日卒

积号 包光院殿花室妙般 葬報恩寺

后妻 於恵 吉村場左衛門源愛通女 宝暦七_{丁丑}生

享和二年_{壬戌}九月九日卒 享年四十六

积号 真光院殿楽邦妙誓 葬報恩寺

妾 古乃 文政十年_{丁亥}五月五日卒

积号 蓮光院栄観 葬于報恩寺

（A）に津軽多繕奥方（記号エ）とあるのは、（C）によると后妻於恵

にあたり、戒名も同一である。(C)にある吉村場左衛門について「本行寺過去帳」をみる。

「史料14」「本行寺過去帳」一九日

明和六乙丑八月

了照院殿宗親日定

吉村場左衛門

后妻於恵の生没年から、吉村場左衛門源愛通は了照院殿宗親日定であるとみられる。場左衛門は明和六年(一七六九)八月には用人であった。⁽⁴⁶⁾后妻於恵は津軽貞栄に嫁しても法華信仰を持ち続け、生家の吉村家を通して本行寺での追善供養を望んだものとみられる。

(C) 妾古乃に院号を付してあり、院殿から一段下げた戒名になっていることが解る。

(4) 久祥院(与曾)

久祥院(記号オ)は唐牛九朗右衛門の娘で、叔母婿の添田理兵衛^(貞成)の養女になり、弘前城奥女中として奉公し、三代藩主信義の側室になって四代藩主信政・政朝・為貞・正秘・米を生んだ。⁽⁴⁷⁾添田儀左衛門の姉にあたる。明暦元年(一六五五)信義の死後、久昌院を称し、天和元年(一六八一)、久祥院と改めた。北の丸に住み、菊御前とも云われ、酒乱の信義を諫めた話が残っている。⁽⁴⁸⁾「久祥院殿写経」(県重宝)について、渡辺麻里子氏は、延宝六年(一六七八)に久祥院が書写して護持していた経巻を、没後に信政が供養のために隣松寺(曹洞宗 弘前市)に寄進したものと考察している。⁽⁴⁹⁾鳥の子紙に銀泥の界線が引かれた料紙に、音よみ

の平仮名で法華経八巻を書写し、黒塗りに金泥で蓮華を描いた蒔絵の厨子に納めている。

「法華経法師品第十」に、法華経を「受持・読誦・解説・書写」する修行が説かれていて、久祥院は法華経を写経する功德を深く信じていたと考える。元禄五年(一六九二)、六三歳で亡くなり、⁽⁵¹⁾火葬後に多田・添田家の菩提寺の隣松寺に埋葬され、位牌堂・墓石が現存する。⁽⁵²⁾

「本行寺過去帳」には次のようにみえる。

「資料15」「本行寺過去帳」四日

元禄五千申四月

久祥院殿華岳良栄大姉

信政公御母

「本行寺過去帳」に久祥院と四例(記号コース)の記載があり、添田家では菩提寺の他に本行寺での追善菩提を願ったものと考ええる。

(5) 法雲院(曾野)と梅応院(綱)

① 法雲院殿(記号カ)は白川藩主松平忠尚の娘で、桑名藩主松平忠弘の養女となり、元禄四年(一六九二)、五代藩主信寿に嫁いで、幸・信興を生んだ。享保一四年(一七二九)、五七歳で亡くなり津梁院(天台宗)に埋葬され、戒名を法雲院殿樂邦浄安大姉とする。⁽⁵³⁾

「本行寺過去帳」に次のようにある。

「史料16」「本行寺過去帳」二日

享保十四乙酉七月

法雲院殿樂邦浄安大姉

信寿公御前

法雲院の法華信仰は次の梅応院と共に考察する。

② 梅応院（記号キ）は醍醐冬基の娘で、近衛家熙の猶子となり、享保元年、五代藩主信寿の世子信興に嫁いで、六代藩主となる信著と輝を生んだ。同一四年、二九歳で死亡し、津梁院に埋葬され、戒名を梅応院殿照月恵秀大姉とする。⁵³

「本行寺過去帳」に次のようにある。

「史料17」「本行寺過去帳」八日

享保十四乙酉九月

梅応院殿照月恵秀大姉

信著公御母儀

近衛家は応仁の乱（一四六九）以前から熱心な法華信仰を持ち、近衛家から出た玉洞院日秀は本満寺（日蓮宗 京都市）を開いている。⁵⁶ 梅応院も法華信仰を持ち続け、二か月前に死亡した法雲院と一緒に日蓮宗での追善供養を遣い残したことから、江戸藩邸から国元への指示があったとみられる。このことから、本行寺は過去帳に二人の津梁院の戒名を記載したと考える。

現在、津梁院の津軽家墓地から法雲院・梅応院の墓石は失われて存在しない。⁵⁷

(6) 円受院（縫）

円受院（記号ク）は、六代藩主信著の側室で七代藩主となる信寧と、旗本（四七〇〇石）仙石弥兵衛の養子になる好古の生母になる。江戸の

町人久左衛門の娘で、父は召出されて田中武次右衛門と名乗り、御手廻組に入った。⁵⁸

寛保元年（一七四一）五月二十八日、二の丸の長屋で好古を生むが、六月一日に臨終に陥った。「国日記」から次の三項目をみる。

「史料18」「国日記」寛保元年六月一日条

① 御広敷御年寄格女中大病^二付、田村源太兵衛上家^{江引移}^三付、左之通、

② 右於同前女中病死^二付、寺之義、表使^江承合候処、在生之内本行寺旦那相極差置候由、勿論病中祈祷^茂相頼申候^二付、弥本行寺^江取

置候様申付之、

右作^{（室方）}右衛門^江達之、

③ 本行寺^二墓所見斗之儀、棟方弥市朗^江承合候様申付之、円受院は生前から本行寺（日蓮宗）に病中の祈祷と葬儀・埋葬を依頼していて、藩庁はこれに沿った扱いをしていることが解る。葬儀は四代藩主信政の生母久祥院と同格の扱いとし、延享二年（一七四五）になって円受院と称することになった。⁵⁹

本行寺は藩庁から宝暦八年（一七五八）に供料三〇俵を給され、安永三年（一七七四）に三〇石の加増を受けている。⁶⁰ 同八年、藩庁は円受院霊前に一〇〇両を備えると、本行寺は藩士・領民に貸付け、利息を得た⁶¹と申し出た。この備金は勘定奉行が米相場で扱い、一〇〇両は封印して御金奉行が預かり、年一五両を渡す扱いになった。

位牌所・霊屋が整備されたが、現在、霊屋は無く墓石のみが残されている。

円受院は江戸町人の出であり、強い法華信仰を持ち続けたものとみられる。

(7) 密乗院(房)

密乗院(記号ケ)は九代藩主寧親の側室で、文化元年(一八〇四)、御先下りで、藩主より四日前に弘前に向かった。五月二日から癩のために舟形(山形県舟形町)で養生し、快方に向かったところから出発したが、院内(秋田県雄勝町)で亡くなった。そこから九里離れた横手の正法寺(日蓮宗 横手市)に埋葬され、墓石には次のようにある。

〔史料19〕正法寺「密乗院墓石」

(右) 維時 文化元年^{甲子}歳六月二日

(正面) 帰本 密乗院即達日相大姉墓

(左) 江戸南伝馬町 佃屋喜平次娘房 廿二歳

位牌は明治三十六年(一九〇三)の火災で失われ、津軽家の志で建てられていて、「密乗院殿即達日相大姉霊」とあり、院殿戒名が付けられてある。

「本行寺過去帳」には二か所に記載がある。

〔史料20〕

(A)「本行寺過去帳」二日 二段目

文化元^{甲子}六月

本光院妙瑞日相大姉

屋形様御側女中 於房

御供下り之節、途中ヨリ病氣ニテ秋田領横手ニテ病死、正法寺^江

葬送、当時当寺エモ小判五両納、打敷二枚アリ

(B)「本行寺過去帳」二日 一段目

文化元^{甲子}歳六月 二十二才^(朱筆)

密乗院即達日相大姉

^(朱筆)江戸南伝馬町 佃屋喜平次娘 房

本行寺(日蓮宗)の位牌・墓石には「密乗院即達日相大姉」とある。(A)本光院の戒名は、付添人高杉友衛が弘前に着いて寧親に報告後、藩庁が正法寺と同宗の本行寺に供養を依頼した時のもので、本行寺も女中の扱いで過去帳の二段目に記載されている。(B)密乗院の戒名は、親元の畑屋喜平次が江戸から横手の正法寺に立ち寄り、その後本行寺を訪れ、正法寺での戒名密乗院を以って追善を願い出て、墓石の建立を行った際のものとして推定する。このため、本行寺の方も過去帳の一段目に改めて記載し、施主の名前も朱筆で記入したと考える。^(註)

安政五年(一八五九)、正法寺の檀家斎藤與一郎・斎藤多四郎から、密乗院への合力金の趣旨で祠堂金二〇両を寄付する申し出があった。弘前藩庁は横手駅本陣松本吉右衛門から両名は横手町第一の重立・分限者であると聞き、寄付を了承し、関係者四人へ挨拶料として各金一步を届けている、祠堂金年利二両で、位牌の手入れ、墓地の敷石の修理、柵立を行っていた。^(註)この寄付は密乗院没後五五年の経過で、位牌・墓地の荒廃を見かねてのこととみられる。

密乗院は江戸町人の出で、生家の法華信仰を持ち続けた例と考える。

過去帳は施主から追善回向を依頼された時に記入されることから、女人法華で取り上げた例は、施主側が菩提寺で授けられた戒名を持って本行寺での追善供養を行ったものとみられる。

法華経は天台宗・曹洞宗・日蓮宗で読誦する經典で、女人法華で挙げた女性達は嫁ぎ先でも法華信仰を持ち続け、菩提寺と本行寺での追善供養を求めたものと考ええる。また、江戸からの法華信仰の持ち込みや、親類や嫁ぎ先の所縁により入信したことが想定できる。

おわりに

津軽家一門の法華信仰を、津軽信経家とその周りから考察してみた。円受院（記号ク）は生前から日蓮宗での葬儀・埋葬を遺言していた唯一の例である。「本行寺過去帳」と「津軽家一門并六家系譜」の記載を考古学の調査の成果で裏付けることができ、法華信仰にあった女人の存在を明らかにすることができた。

近世は家を中心とする社会のため、女性は嫁ぎ先の信仰に係っていた。しかし、その中であって生家の法華信仰を貫いた女性の姿を追求することができた。そこには、日蓮宗の祈祷による現世利益と法華信仰による女人成仏の救済があったと考える。

信経は耕春院（曹洞宗 現宗徳寺）に埋葬されたが、室とその母は江戸より弘前に移ってから法華信仰を持ち続け、本行寺（日蓮宗）での埋葬・追善供養を望んだことが推定できた。二代政模は祖母・嫡母、三男の埋葬・追善供養から本行寺を菩提寺と定めたと考える。また、五番善神・三十番神・日蓮上人座像を寄進し、これを納める護国堂（祈祷堂）を領内勸化により建立している。

信経家は本行寺を檀家とする松浦家との婚姻があるが、同じ法華信仰

の家同志との婚姻を積極的に進めた傾向はみられない。

弘前藩に於いて祠堂金の利息による運用の例が明らかになった。また、秋田藩領横手の正法寺でも祠堂金の年利をもって墓所の手入れに利用する例があった。

課題として次の四点の考察が残った。

- ① 法華信仰を堅持し、出家して尼僧になった女性の存在。
- ② 日蓮宗以外の諸宗における女性の信仰。
- ③ 藩主家と一門の妻・妾の存在。
- ④ 祠堂金を含めた寺院経済。

最後に調査にご協力いただいた本行寺・中村香韻師、宗徳寺・黒瀧信行師、報恩寺・小林伯裕師、弘前大学・関根達人教授に謝意を表します。

註

- （１）植木雅俊『差別の超克―原始仏教と法華経の人間観』（講談社学術文庫 一〇一八）二四五―二五七頁。『法華経とは何か―その思想と背景』（中公新書 二〇二〇）五八・五九・八八頁。『日蓮の手紙』（角川ソフィア文庫 二〇二二）二七三―二七五頁。
- （２）石川教張「日蓮の女人成仏法門について―法華経提婆品の龍女成仏を中心に」（『大崎学報』第一五五号 一九九九）二七・二八・四九―五一頁。
- （３）菅原征子「法華宗寺院の特色と開基女性」（『近世の女性と仏教』（吉川弘文館 二〇一九）一五四―一五七頁。
- （４）北村行遠『近世開帳の研究』（名著出版 一九八九）八四―九四頁。
- （５）望月真澄『法華信仰のかたち―その祈りの文化史』（大法輪閣 二〇〇七）一一七・一一八、一八一・一八二頁。『江戸の法華信仰』（国書刊

行会 二〇一五）二六～二八頁。

(6) 『新編弘前市史』通史編3（近世2）（弘前市企画部企画課 二〇〇三）六五四・六八〇頁。

(7) 拙稿「弘前藩領における勸化について」（『弘前大学国史研究』第一五〇号 二〇二一）二三～四一頁。

(8) 弘前市立弘前図書館津軽家文書。現在、「国日記」の寛延三年～元治元年は「弘前市立弘前図書館」のホームページに入り↓「おくゆかしき津軽の古典籍」↓「弘前藩庁日記」↓「国日記」と進むとデジタル化されているものを見ることができる。

(9) 弘前市立弘前図書館八木橋文庫「津軽家一門并六家系譜」YK二八八―一五。津軽家一門は、津軽薫・同清温・同廷尉・同八千穂・同尚志、六家は、森岡守衛・大道寺繁禎・佐田大之丞・梶田不曲・傍嶋正邦・津軽範より提出した由緒書を、大道寺繁充が編纂している。繁充は大道寺繁禎の弟で、明治元年に二〇〇石の分知を受け、書院番を勤めている。

(10) みちのく双書第五集『津軽藩旧記伝類』（青森県文化保護協会 一九五八）。

(11) 関根達人『墓石が語る江戸時代―大名・庶民の墓事情』（吉川弘文館 二〇一八年）六二～六六頁。

(12) 田澤正『津軽兵庫の越境顛末―四代藩主信政治世の裏面史』（北方新社 二〇〇七）五四～七四頁。

(13) 「国日記」天和元年二月五日条。

(14) 昭和五十七年度墓確認調査報告書『弘前の墓』西茂森・新町（弘前市立博物館 一九八三）四〇・一二七頁。

(15) 弘前市立弘前図書館津軽古図書保存会文庫「新選津軽系譜」甲五一―一〇一～一〇四。

(16) 前掲註（12）。福井敏隆「支配機構の一考察―寛文・延宝期を中心と

して」（『津軽藩の基礎的研究』国書刊行会 一九八四）二〇四頁。浪川健治「近世武士の生活と意識 添田儀左衛門日記 天和期の江戸と弘前」（岩田書店 二〇〇四）一二五・一二六・一三三頁。

(17) 「江戸日記」寛文一二年閏六月二七日条。

(18) 「国日記」延宝六年六月二〇日条。

(19) 「国日記」延宝七年一月六日、同一二月二四日条。

(20) 「国日記」元禄一三年六月四日条。

(21) 「国日記」天和三年二月五日条。

(22) 「国日記」貞享三年八月七日条。

(23) 前掲註（20）。

(24) 森岡啓二氏蔵。

(25) 須藤弘敏監修 新編弘前市史特別編『弘前の仏像』（弘前市市長公室企画課 一九九八）一五九・一六〇、二二八頁。

(26) 「国日記」享保元年一〇月五日。

(27) 「国日記」享保六年一月一日・同七年八月一〇日条。『青森県の近世寺社』（青森県教育委員会 一九七九）三二頁。『新編弘前市史』資料編3（近世編2）（弘前市企画部企画課 二〇〇〇）一三四一頁。

(28) 「国日記」享保九年五月二五日条。

(29) 「国日記」享保七年二月一五日条。

(30) 浪川健治「信明の模索―襲封、そして権力と権威」（『名君の時代―十八世紀中期～十九世紀の藩主と藩政』清文堂出版 二〇一九）二七～五六頁。

(31) 「国日記」文政九年一〇月一九日条。「妙経寺最初より記録写」（『黒石市史』資料編Ⅰ 黒石市 一九八五）六八頁。江利山義顕『青森県日蓮宗寺院史』（私家版 一九六八）五九頁。関根達人『石に刻まれた江戸時代―無縁・遊女・北前船』（吉川弘文館 二〇二〇）六四・六五頁。

- (32) 弘前市立弘前図書館津軽家文書「嘉永六丑年高館村と法嶺庵伐木採合一件」(TK六五一―一二)。「妙経寺最初ヨリ記録写」(『黒石市史』資料編I 黒石市 一九八五) 七一頁。
- (33) 拙稿「弘前・黒石津軽家の両敬について」(『弘前大学国史研究』第一三八号 二〇一五) 三一・三二頁。
- (34) 「国日記」弘化二年四月一日条。
- (35) 「国日記」弘化三年一月二五・二六・二七日程。山上笙介『続つがるの夜明け』下巻之式(陸奥新報社 一九七五) 一八六―二一〇頁。
- (36) 「国日記」安政元年七月二〇日程。
- (37) 早稲田大学図書館 古典籍総合データベース 請求記号 文庫三一―e〇九四二。
- (38) 江利山義顕『青森県日蓮宗寺院史』(私家版 一九六八) 九三頁。
- (39) 「国日記」弘化二年四月一日条。
- (40) 「国日記」安政五年三月一五日程。
- (41) 弘前市立弘前図書館津軽家文書「弘前分見真図」TK二九〇・三一二〇。
- (42) 弘前市立弘前図書館貴重一般郷土資料「士族在籍引越の際之地図」KK二九〇・三シゾ。
- (43) 八代藩主信明は、天明四年(一七八四)から寛政三年(一七九一)まで「在国日記」を書き残した(国文学研究資料館陸奥国弘前津軽家文書資料番号B二二―三四一)。「『新編弘前市史』資料編3(近世編2)(弘前市企画部企画課 二〇〇〇) 資料番号一九九、五四一―五七三頁」。
- 〔同〕通史編3(近世2)(同 二〇〇三) 三六八―三八一頁。
- (44) 『日蓮宗読本』(日蓮宗 一九五七) 二四七頁。『特別展万両塚―芳心院と池上本門寺』(池上本門寺霊宝殿 二〇一二) 一一・一二頁。
- (45) 前掲註(5)。
- (46) 「国日記」明和六年八月一七・一九日程。
- (47) 弘前市立弘前図書館八木橋文庫「津軽偏覧日記」TK二一五―九三(畑山信一編『津軽編覧日記』解説本二(私家本 二〇〇七) 一一〇・一一一頁)。同館津軽古図書保存会文庫「新選津軽系譜」甲五―一〇三。浪川健治『近世武士の生活と意識 添田儀左衛門日記 天和期の江戸と弘前』(岩田書店 二〇〇四) 八・九頁。
- (48) 前掲註(10) 八四―八七頁。山上貢『続つがるの夜明け』上巻(陸奥新報社 一九六九) 二二四―二一九頁。
- (49) 渡辺麻里子「隣松寺『久祥院殿写経』(仮名書き法華経)をめぐる一考察」(『弘前大学人文社会科学部論叢』第三号 二〇一七) 一―三五頁。『つがるのお寺さん』上(東奥日報社 一九七七) 一八・一九頁。『津軽の名品』(弘前市立博物館 一九八九) 四八頁。『青森県の文化財』(青森県教育委員会 一九九七) 一二五頁。
- (50) 橋爪大三郎・植木雅俊『ほんとうの法華経』(ちくま書房 二〇一五) 二二一―二三九頁。
- (51) 「国日記」元禄五年四月四・五日程。
- (52) 『青森県の近世社寺』(青森県教育委員会 一九七九) 五六頁。前掲註(14) 四二頁。『新編弘前市史』資料編3(近世編2)(弘前市企画部企画課 二〇〇三) 七三三頁。
- (53) 弘前市立弘前図書館津軽古図書保存会文庫「新選津軽系譜」甲五―一〇一。
- (54) 長谷川成一「陽明文庫蔵近衛家雜事日記」(1)(年報『市史ひろさき』第四号 一九九五) 一二一・一二二、一三七頁。
- (55) 前掲註(53)。
- (56) 神田千里「中世後期の公家社会にみる家の信心」(『東洋大学文学部紀要』第五二集 一九九八) 七―一二頁。河内将芳『戦国仏教と京都―法華宗・日蓮宗を中心に』(法蔵館 二〇一九) 四七―五二頁。

- (57) 拙稿「津梁院境内図」(年報『市史ひろさき』第四号 一九九五) 九三頁。
- (58) 前掲註(10) 八九頁。
- (59) 「国日記」延享二年六月一日条。弘前大学附属図書館弘前八幡宮古文書一六「御用日記」延享二年九月二〇日条。
- (60) 「国日記」宝暦八年九月二八日、安永三年三月二九日条。
- (61) 「国日記」安永八年二月一三日条。
- (62) 拙稿「弘前藩における旅人の死の取り扱いについて」(年報『市史ひろさき』第一〇号 二〇〇二) 一〇二～一〇七頁。昭和五八年度墓確認調査『弘前の墓』銅屋町・新寺町・笹森町・田町・ほか(弘前市立博物館 一九八四) 一〇二頁。
- (63) 「国日記」安政六年六月一四日条。

(しのむら・まさお 弘前大学国史研究会名誉会員)

系図 津輕信經家

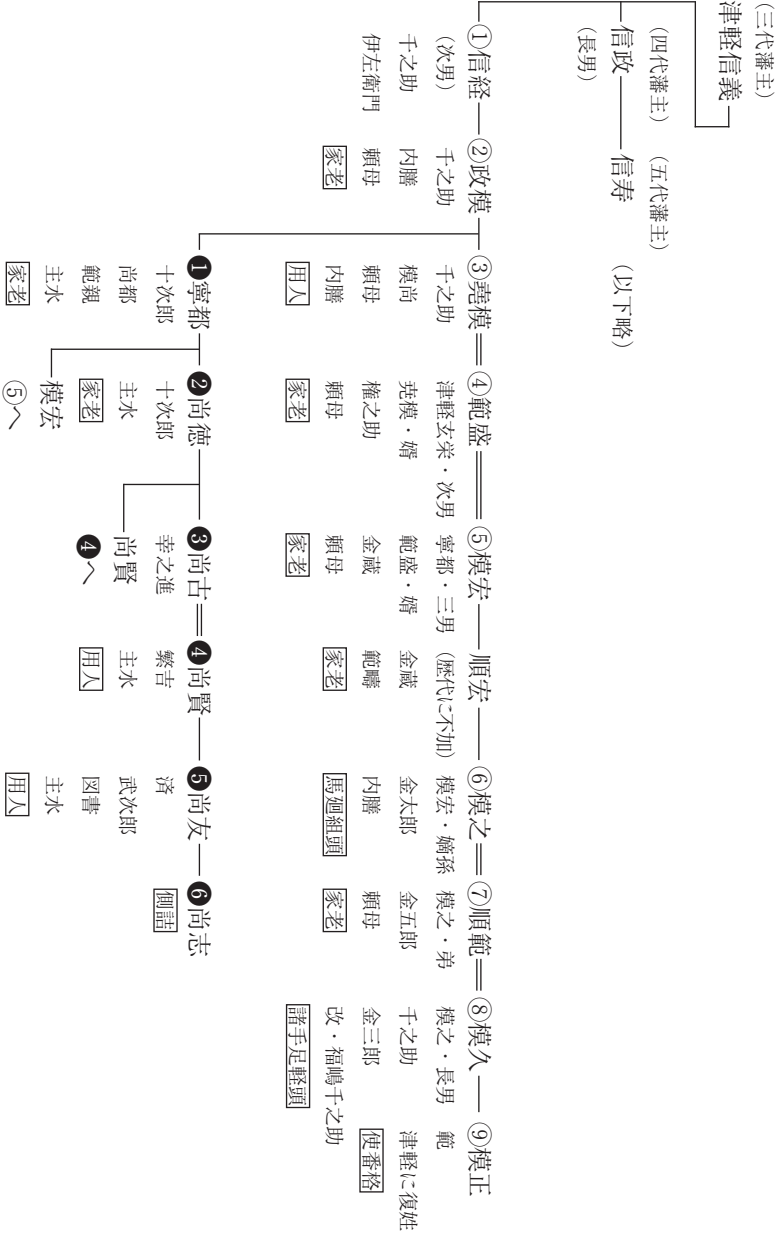


表 1 津輕信經家の法華信仰

No.	年号	西暦	月	閏	日	人名	本行寺過去帳	津輕家一門并六家系譜	墓石	備考
1	寛文12	1672		6	27	伊左衛門御袋				死亡、国元へ飛脚(江戸日記)
2	延宝6	1678	6		20	伊左衛門北堂				7回忌・貞昌寺・香奠白銀2枚
3	延宝7	1679	11		6	志津之助				信経・次男
4	延宝7	1679	12		24	綱之助				信経・長男
5	天和1	1681	12		5	①信経	覚(應)院殿深山幽松大居士	覚(了)院殿深山幽松	有	耕春院(現宗徳寺)埋葬・墓石
6	元禄8	1695	5		8	政模母	椿庵妙寿大姉	椿庵妙寿大姉		森岡氏由緒書
7	宝永4	1707	4		2	信経室	遍光院殿妙感日長	遍光院殿妙感日長	有	本行寺埋葬、津輕政模母儀
8	正徳1	1711	6		25	政模・祖母	智善院殿妙観日中	—	有	正徳元年76歳死亡
9	享保6	1721	8		26	長之助	秋光院殿移景	—		政模・三男
10	享保9	1724	5		25	②政模	輝光院殿法政日模	輝光院殿法政日模	有	本行寺埋葬、44歳、日蓮上人座像銘・津潤院殿政模日軽
11	享保11	1726	2		6	本行寺10世日進	勇猛院日進		有	日進遷化、日蓮上人座像銘・寿遠院、法立寺・墓石
12	享保13	1728	8		24	政模室真武	法光院殿妙政日圓	法光院殿妙政日圓	有	本行寺埋葬
13	宝暦3	1753	4		3	③堯模	圓入院殿法(耀)日栄	圓入院殿法(輝)日栄	有	本行寺埋葬
14	宝暦7	1757	6		3	寧都室以千	徧照院殿妙清日受大姉	徧照院殿妙清日受		本行寺埋葬
15	明和2	1765	10		24	範盛室	自勝院殿妙圓日耀	自勝院殿妙円日耀		堯模娘、本行寺埋葬
16	明和3	1766	8		9	寧都後室	秋月院妙乘日明	秋月院殿妙乘日明	有	本行寺埋葬
17	明和7	1770	6		5	④寧都	唯照院殿一円日法居士	唯照院殿一圓日法	有	本行寺埋葬
18	天明4	1784	3		12	堯模室	智泉院殿妙栄日輝	智泉院殿妙栄日輝	有	本行寺埋葬
19	寛政4	1792	3		30	④範盛	自然院殿耀円日利	自然院殿耀円日利		本行寺埋葬、砂子沢・鬼子母神堂・法華経寄進
20	享和3	1803	10		16	模宏室	淳昌院殿妙周日縁	淳昌院殿妙周日縁		範盛の娘、本行寺埋葬
21	文化3	1806	10		8	⑤尚徳	照中院殿道義日清	照中院殿道儀日清		本行寺埋葬
22	文化4	1807	6		15	尚徳室	—	理中院殿妙儀日照		本行寺埋葬
23	文化6	1809	3		20	⑥尚古	—	義光院殿道節日仁		本行寺埋葬
24	文化10	1813	11		26	範盛後室	安住院殿妙圓日中	—		砂子沢・鬼子母神堂・法華経寄進
25	文政6	1823	8		26	尚賢(繁吉)室	全得院殿妙経日意居士	全得院殿妙経日意		本行寺埋葬
26	文政12	1829	12		15	⑥範之	孝顕院殿妙雄日照居士	孝顕院殿智雄日照		本行寺埋葬
27	天保2	1831	1		4	⑤模宏	智淳院殿義輝日(周)居士	智淳院殿義輝日(固)	有	本行寺埋葬
28	天保9	1838	11		19	順宏室	信(鏡)院殿妙浄大姉	信(澄)院殿妙浄日明		本行寺埋葬
29	弘化3	1846	1		24	順宏	教学院殿東山日旭居士	教学院殿東山日旭		本行寺埋葬
30	嘉永1	1848	2		9	④尚賢	自得院殿勇玄日全居士	自得院殿勇玄日全		本行寺埋葬
31	嘉永2	1849	7		16	尚古室	貞善院殿妙歎日喜	貞善院殿妙観日喜		本行寺埋葬
32	安政2	1855	10		6	順範室乃婦	智光院殿妙玉日正大師	智光院殿妙玉日正	有	本行寺埋葬
33	文久1	1861	5		13	⑧範久	勇猛院殿義顕日定居士	勇猛院殿義顕日定	有	本行寺埋葬
34	元治1	1864	12		8	⑦順範	篤潤院殿原徳日輝居士	篤潤院殿原徳日輝	有	本行寺埋葬
35	明治1	1868	12		27	範之室	智顕院殿妙照日孝大姉	智顕院殿妙照日孝		本行寺埋葬
36	明治8	1873	8		5	⑤尚友	遙光院殿自得尚友日明	遙光院殿自得尚友日明		本行寺埋葬
37	明治44	1911	1		13	津輕琢玄	—			順宏8男、本行寺26世日琳弟子、実相寺19世唯仏院日魁

表 2 女人法華

記号	年号	西暦	月	閏	日	人名	本行寺過去帳	津輕家一門并六家系譜	墓石	備考
ア	宝永7	1710	7		30	津輕勘解由・母	慈眼院殿妙乘日量	慈眼院殿妙乘日量	有	2代信枚9男為節家2代為永室、3代久豊(津輕勘解由)母
イ	享保7	1722	7		25	津輕中務・伯母	浄閑院殿理屋日専	—		3代信義17子政順家3代政幸(津輕中務)
ウ	寛政3	1791	1		12	津輕貞如室千屋宇	蓮照院殿実相妙(悟)日乗	蓮照院殿実相妙(耀)	有	報恩寺過去帳・蓮照院実相妙(耀)大姉、墓石
エ	享和2	1802	9		9	津輕貞栄後室	真光院殿楽邦妙誓大姉	真光院殿楽邦妙誓大姉	有	報恩寺過去帳・真光院殿楽邦妙誓大姉、墓石
オ	元禄5	1692	4		4	4代信義側室与曾	久祥院殿花岳良栄大姉	—	有	隣松寺・位牌堂・墓石
カ	享保14	1727	7		2	5代信寿室園	法雲院殿楽邦浄安大姉	—	曾存	津梁院
キ	享保14	1227	9		8	信興室綱	梅広院殿照月恵秀大姉	—	曾存	津梁院
ク	寛保1	1741	6		14	6代信義側室縫	円受院殿妙顔日珖大姉	—		7代信寧・好古の生母、存生之内本行寺を旦那、祈禱依頼
ケ	文化10	1808	6		2	9代享親側室房	蜜乗院殿即達日相大姉	—	有	本行寺過去帳・本光院妙端日相大姉
コ	宝永7	1710	7		4	添田儀左衛門室	智性院殿妙蓮日華	—		
サ	享保8	1723	8		11	添田儀左衛門娘	玉妙院秋佳	—		
シ	享保8	1723	8		24	添田儀左衛門娘	空明院殿秋光日景	—		
ス	寛政1	1789	11		26	添田儀左衛門室	祥壽院殿妙屋日盛	—	有	隣松寺・墓石・祥壽院殿加屋妙盛大姉